

アンティークな音色のドアベルがからりと鳴るのに、宮川光希は振り返る。

常連客のひとりが二人の舞妓を連れて顔を覗かせるのに、光希はにっこりと愛想よく微笑んだ。

高校卒業と同時に水商売の世界に足を踏み入れて十年、まかり間違っても、表のクローズの札が見えないのかなどとは言わない。

「光希ちゃん、三人やねんけど、席空いてる？」

「いやあ、根本さん、すんません。今日は僕の都合で今から少し閉めるんやわあ。六時過ぎにはまた戻らんですけど」

「ああ、そうなん？」

眼鏡をかけた男の後ろで、ええつ、光希さんとこのコーヒー飲みたかったわあ、と舞妓二人が口々に黄色い声を上げる。言いまわしは舞妓言葉だが、最初の感嘆詞とイントネーションとで、生粋の京都の子ではないとわかる。

「ふく春ちゃん、豆鈴ちゃん、堪忍な。また今度来てくれる？ 待つてるし」

声を上げた二人がどこの舞妓か早々に見て取った光希は、男女問わずに手玉に取るなどといわれている

美貌に、柔らかな極上の笑みを浮かべてみせた。

「もう、せっかく光希さんと話したいと思ってきたのに、許されへんわあ」

ふんふんどうすう、などと可愛くない媚び方をするのは、普段から怖いもの知らずで傍若無人な豆鈴だ。

ほんまに口のきき方知らんねんなあ、そんなもの言いするから煙たがられてんのにと、光希は見る者を魅了する艶やかな笑みの裏側でこっそり呆れる。

憎まれ口は、相手の心を八割方つかんでいる時にこそ魅力的だが、気のない相手にとつては苛立ちを誘うだけのものだ。

——そやから、憎まれ口は叩いたらあかんのえ。可愛気のない子やて思われんのは、みっちゃんも悲しいやろ？

昔、そう言つて自分をふんわりいなした母の声が、ふっと思い出される。

「今度来てくれた時には、コーヒー、サービスするし、堪忍な。根本さんも、また来てくれはりますか？」

少しカウンターのの上に身を乗り出すようにして光希が言うと、光希に甘い男は鼻の下を伸ばしたような顔になる。

君みたいな綺麗で秀囲気のある男の子、見たことないわ…と、いつも根本はつくづく言う。若い舞妓を連れ歩くのが嬉しい完全なノーマルだが、光希に限ってはちょっとよろめいてもいいなどと、冗談交じりに笑っている。

「ええ、ええ。ちょっと顔見たかっただけやから、また来るわ」

「おおきに、ありがとうございます。待ってますし」

光希がちぢちぢと手を振ると、根本は嬉しそうに手を振り返してくる。光希はさらに後ろの豆鈴やぶく春にも、ちぢちぢと手を振ってやった。

一口許の笑みは、ドアが完全に閉まる最後まで消さない。

中にいるとわかるのに表の鍵をかけるのもどうかと思つて開けておいたが、これで三組目だ。少し店を閉めようという日に限つて、妙に客がやってくる。

「…なんやらな」

表に出た光希はドアに鍵をかけながら、誰にともなく呟いた。

時刻は夕刻、普段は昼過ぎから夜の一時過ぎまで店を開けているので、確かに夕飯前にコーヒーでも…と、寄る人間がいるのかもしれないが、今日に限つて多い。

祇園の少し奥まった小路にひっそりとあるカフェバー「桜月夜」は、光希の姉の芸妓美代春の店だ。普段は光希が任されており、美代春もちよくちよく顔を出す。

二人して、生まれつからの花街育ちだ。名芸妓、美人芸妓として知られていた、今はもう亡き母、美代篠の美貌を、姉弟揃つて受け継いだことで知られている。

光希は今年二十七歳になる。店を任されてからは五年ほど。高校卒業からそれまでは、知り合いの店でしばらくウエイターやバーテンダーとして働いていた。

歯医者予約まで少し余裕を持つて出たせいで、光希は普段はあまり歩かない夕刻時の花街をぶらぶらと歩いた。

夕暮れ時のこの時間は、まさに街全体が夕化粧にいそむ女の横顔のようだ。

薄暗い路地の奥に闇が兆しはじめ、仕出し屋や料亭の煮炊きものの匂いがあちこちから漂う。店の裏口からは盛んに水音や陶器の触れあう音と共に、夜に備えて慌ただしく人を采配する声が聞こえてくる。

古い町家で、母の美代篠が座敷に出る用意をしていたのを、横で見っていた幼い頃のことかふと思ひ出される。

あれはもう少し早い夕刻にさしかかる前の時間だったが、母が両肩まで露わにして白粉を水刷毛で塗つていた様子は、午後の黄みを帯びたぼんやりとした光で肌がぼうつと浮かび上がつて、ちよつと信じられないぐらいに綺麗だった。

母が人前でほとんど見せることのなかったあの化粧中の顔を、光希は今も覚えている。肩口に甘えてもたれかかると、化粧品の匂いとは別に母親の肌の匂いがほんのり香ったことも覚えている。

街灯に明かりが灯つたら、昼間は日常的な顔に戻つていた街全体が、それを合図にいよいよ夜の街へ装いを変える。それまでの束の間の、昼とも夜ともつかない曖昧な時間だ。

秋口にしてはぬるいような空気の中を、囃子と呼ばれる一般の通り抜けが許された細い小路を抜けてゆく。そこから少し南へ下がると、有名な料亭が何軒か軒を並べる通りになる。

ちよどその通りに入る手前、一軒の料亭の裏口と通りとの間あたりで、白い調理服を身につけた板前を相手に、女がひとり、何かまくし立てているのが見えた。

なんか空気が悪いなど、生まれて以来ずっと色街で暮らし、色恋沙汰の機微に長けた光希はひと目見て思った。

短く刈り込んだ髪に白の和帽子を身につけた板前は、遠目にもいい男風だ。

しかし会話まで聞こえなくとも、そのあまりの素っ気なさは、乾いた表情や相手に向けた身体の角度などでわかる。相手に気がないどころか、興味そのものがないのだと、花街で生まれ育った経験上、そして光希がもともと備えた本能でわかる。

あんな態度を見る男には、ぎゃんぎゃん噛みつくだけ無駄、下手をすれば相手の嫌悪感を煽るだけだ。さらに言うなら、男の側は相手に気がないにしても、女があそこまで逆上する前に適当におだてて躲した方が良策だ。

確かに女の態度は見ているだけでも辟易するが、それにしても男は男でやりようが悪い。

最後に男は何か言い、小さく会釈すると、女に背を向けて裏口から店に戻ろうとする。

にべもない男の様子に諦めたのか、女も表通りへと足を向けた。ずいぶんな剣幕だった割には、引き際はあっさりしたものだ。

これで終わってくれて助かった…と、二人の雰囲気が悪さに少しずつ歩く速度を落とすつあった光希は足を進めた。ちょうど横を通りかかる時に、間の悪いところに行き会わずによかったものだ、すつきりと白い板前服の似合う長身の男を好奇心からちらりと眺める。

すると、いったん表通りのほうへ姿を消した女が、何を思ったか、水打ち用の手桶を片手に鬼のような形相で引き返してきた。

何を…と、光希は驚いて女を眺める。

よし…さんつ、と叫んだ女の声は、甲高く歪んで聞き取れなかった。

「馬鹿にしないでっ！」

呼び止められて振り返った男に、女は真正面からバシヤリと手桶の水を引っかけた。

「…っ…」

さすがの光希も、目の前の修羅場にとっさには声も出ない。

手桶に入れられていた柄杓は弾みで男の脇の壁に当たり、派手な音を立てて道に転がる。

驚き呆れて固まった光希の前で、女は頭から水をひつかぶった男を尻目に、手にしていた手桶をガラんと道ばたに放り出し、さっさと通りへと出てゆく。

ずぶ濡れになった男が、無言で濡れた和帽子を取る。

よく見れば、知った顔だ。

「…いやあ」

光希は控えめに声をかけた。

「誰やと思たら、吉澤さん？」

光希はそう言つて、目にした人間のほとんどが一瞬見入るほどの、とろりと蠱惑的な笑みを浮かべてみせる。

吉澤さんなどと他人行儀な呼びかけをしたが、子供の頃からの顔見知りだった。

吉澤克也といつて、祇園町の光希のかつての実家にほど近い、小さな仕出し屋の息子だ。歳は光希のひとつ上、今は二十八歳になるはずだ。小学校、中学校とずっと同じ学校だった。